

機関番号：15501  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20520085  
 研究課題名(和文) インディジェネス・ビエンナーレの視角から考える国際美術展の土着性  
 研究課題名(英文) Domestication of International Art Exhibition: From a Perspective of Indigenous Biennale 2008-2010  
 研究代表者  
 藤川 哲 (FUJIKAWA SATOSHI)  
 山口大学・人文学部・准教授  
 研究者番号：50346540

研究成果の概要(和文)：

3年間で国内8件、海外16件のビエンナーレやトリエンナーレを調査し、開催される都市や国の土着的な文化がそれぞれに反映している事実を検証した。さらに、その土地特有の文化的背景に根ざした表現が国際美術展で重要性を増している動向に着目して、現代美術における民族芸術や先住民美術の位置づけを再考察し、それらを現代美術、伝統美術といった区分を超えた「地産性」の現われとして捉え直す視点を新たに提出した。

研究成果の概要(英文)：

I researched biennial or triennial style contemporary art exhibitions which had held in 2008-2011, eight exhibitions in Japan and sixteen abroad, and verified that all of them somehow reflect their domestic culture. Through a re-evaluation of "indigenous art" in contemporary art exhibitions, I concluded that "indigenous" can be comprehended as "on-site creativity" without distinction between "contemporary art" and "traditional art".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：美術史(現代美術)、国際美術展史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：現代美術、国際展、民族美術、先住民美術、近代主義

1. 研究開始当初の背景

(1)ビエンナーレ化現象と開催都市の唯一性の強調

1990年代から2000年代にかけて、ビエンナーレ、トリエンナーレと呼ばれる2年毎、3年毎など定期的開催される国際美術展が、国内でも海外でも多数新設された。これをビエンナーレ化現象と呼ぶ。こうした増加現象

に伴い、各国際美術展はそれぞれの独自性を開催都市の唯一性に求めた。例えば、2005年に開催された横浜トリエンナーレは「場にかかわる(サイト・スペシフィック・インターアクション)」を標榜し、現代美術家に横浜の土地柄を表現する作品を委嘱した。また、同年のイスタンブール・ビエンナーレは「イスタンブール」をテーマとし、観光都市、歴史的都市としての都市像を、多様な現代美術作品によって探究することを試みた。

## (2) 先住民美術家の国際美術展への参加

1980年代の「政治的に正しい（ポリティカリイ・コレクト）」現代美術への注目と、多文化主義を背景に、従来、「先住民美術」や「民族芸術」と呼ばれて「現代美術」から区別されていた表現が国際美術展の会場で紹介されるようになった。その先鞭をつけたのが「大地の魔術師たち」展（1989年、パリ、ポンピドゥー・センター）であり、その後1992年のドクメンタ IX（ドイツ、カッセル）ではチェロキーの出自を持つジミー・ダーラムの作品が注目を集め、1997年のヴェネツィア・ビエンナーレ第47回国際美術展ではアボリジニの美術家エミリー・ウングワレーがオーストラリア代表の一人として選出されている。

## 2. 研究の目的

(1) 世界各地で開催されている代表的な国際美術展の現地調査を行って、それぞれの国際美術展の「土着性」を具体的、実証的に析出すること。

(2) 国際美術展の企画趣旨や展覧会批評の分析を通して、インディジェネスな（その土地固有の）美術を重視する美術理論を究明すること。

(3) インディジェネスの新たな訳語として「地産」を提案し、インディジェネス・アートを従来の「先住民美術」や「民族芸術」といった知的枠組みや価値観から分離して、地球時代の課題に応える美術史の新たな基礎概念として「地産美術」の視座を確立すること。

## 3. 研究の方法

### (1) 国際美術展の地域別比較と動向分析

本研究では、大きく国内と海外に分け、国内の8つの国際美術展（越後妻有、横浜、名古屋、神戸、瀬戸内、宇部、北九州、福岡）、そして海外の15の国際美術展（ヨーロッパとその周辺＝ヴェネツィア、マニフェスタ、イスタンブール／アジア＝北京、上海、台北、光州、釜山、シンガポール／オセアニア＝シドニー、ブリスベン／南米＝チリ／アフリカ＝ダカル。このうち光州、釜山、シンガポールは2008年度と2010年度の2回。合計18件）を現地調査し、地域別比較と動向分析を行った。

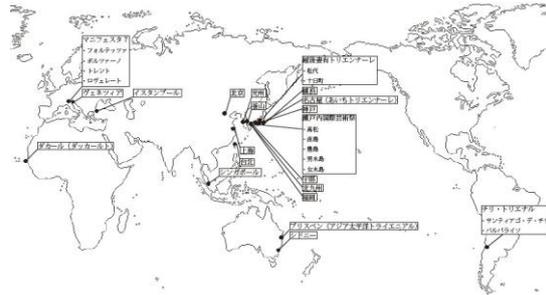


図1. 現地調査先マップ 2008-2010

### (2) 国際美術展と現代美術批評の歴史的検証

上述のうち、イスタンブール、シドニー、北京、ダカルの4件は、今回初めて調査した国際美術展であり、現地で入手可能な限り過去開催分の資料を収集した。そうして集めた資料のうち、図録掲載の論文や図版、美術雑誌の展覧会評等を通して、それぞれの国際美術展の歴史的研究を行った。また、100年以上の歴史を有するヴェネツィアについても、遡及的な資料収集を行っている。なお、瀬戸内（2010年）とチリ（2009年）は本研究期間に新設された国際美術展である。

### (3) 地産性と近似概念の比較考察

「地産」という言葉は、1980年代半ばから使用され始めた「地産地消」の一部であり、「地場生産」や「地域生産」を約めたものである。地域固有の文化に根ざした美術や文化を論じる概念として、これまで用いられてきた「風土」（和辻哲郎）や「民藝」（柳宗悦）と比較考察し、その違いを明確にした。

### (4) インディヘニスモの歴史的考察

先住民の権利や文化、伝統を保護し、経済活動を支援する動きが世界的に広まる転機となったのが、ILOの「原住民及び種族民条約」（1989年）と「先住民族の権利に関する国連宣言」（2007年）である。これらの源流となった米州諸国インディヘニスタ会議（1940年）に着目して、中南米における「インディヘニスモ」の歴史を検証し、「インディジェネス」という用語を取り巻く問題点を析出した。

### (5) 接触領域における地産性の定位

国際美術展は、さまざまな文化的背景を持つ表現者が集まり、開催都市の土地柄に接したり、市民との交流を通して、新たな作品を構想する「接触領域」である。国際美術展に

おける地産性を、接触領域に関する理論的考察と関連づけることによって、「オン=サイト・クリエイティビティ」と英訳し直し、その積極的意義を明らかにした。

#### 4. 研究成果

##### (1) 主な成果

##### ①国際美術展出品作品および会場の記録写真の継続的蓄積

国内 8 件、海外 16 件の国際美術展の実地調査により、出品作品および会場の記録写真を蓄積した。一般的に、現場制作作品を含む現代美術展の図録掲載図版は、編集時に入手可能な参考作品図版であり、出品作品とは異なる。また国際美術展のような大規模展においては、美術雑誌等の展覧会評に掲載される作品写真は、そのごく一部で、会期終了後に展覧会の全体像を再構成することは不可能となるため詳細な記録写真が欠かせない。本研究の基礎的作業として蓄積された記録写真は、2004 年度の花王芸術・科学研究財団の研究助成、2005-08 年の科学研究費補助金若手研究(B)による研究助成による国際美術展の実地調査に加えて、継続的な拡充を行っている現代美術作品データベースを構成するもので、本研究での利用に留まらず、今後の発展的な研究課題における活用に向けて、より多角的な視点で分類・整理を行っていく予定である。

##### ②九州藝術学会発表と同会研究誌への論文掲載

最終年度(2010年)の7月に、九州藝術学会にて研究発表を行い、同発表原稿をもとに加筆修正した論文を同学会誌『デアルテ』(査読有)第27号に投稿した(2011年1月)。2月末、採択の通知を受け、5月末現在、編集・印刷の最終段階に入っている(6月刊行予定)。研究発表では、「地域」概念についてどこまでを含むことが可能か、という質問、「人と人をつなぐ働き」を美術に期待することの妥当性への疑問、また福岡アジア美術トリエンナーレ主催館の学芸員より、運営組織が抱えている問題点の紹介など、多くの有意義な示唆が得られた。研究発表後、9-10月の台北市立美術館主催の国際美術展に関する学術交流プログラムへの参加等を経て、「インディジェネス」を再度英訳する際に「オン=サイト・クリエイティビティ」と言い換える着想へとたどり着き、投稿論文は発表原稿から一段掘り下げた内容とすることができた。

##### ③社会への研究成果の還元

首都大学東京教授・長田謙一氏が代表を務める「プロパガンダと芸術」研究会が主催する公開コロキウム(2009年10月)と、国際コロキウム(2009年1月)の2回にわたって、本研究の調査成果の一部も活用して、異なるテーマで発表し、それぞれの発表原稿を1本にまとめて、大学の紀要『山口大学文学会誌』に投稿した。2回のコロキウムは、どちらも一般市民の参加もあった。また、大学紀要は、山口大学学術機関リポジトリで全文公開されている。

本研究の調査成果を市民に向けて紹介する機会としては、2009年8月のレクチャー・マラソン第3回「山口盆地午前5時」、2010年8月のあいちトリエンナーレ「オープニングシンポジウムⅡ クロストークー国際展の現場」、同年9-10月の台北美術館主催の学術交流プログラム、そして2011年2-3月の第1回と第2回の「福岡市美術館アート・セミナー」が挙げられる。「山口盆地午前5時」は、地元山口で1998年から活動を続けているNPO法人山口現代芸術研究会(YICA)の主催で、秋吉台国際芸術村に滞在中の美術家等も含めて行われる市民向けのレクチャーシリーズである。あいちトリエンナーレの開幕記念シンポジウムでは、基調講演「国際美術展の歴史と役割」(日→英の同時通訳有)と司会を務め、新たに国際美術展を新設した愛知県の県民・市民、参加美術家等を観客に、国際美術展開催の意義を歴史的、地球時代的視点から紹介した。その後シンポジウムの概要を芸術批評誌『リア』第25号(2011年2月)で報告した。台北美術館主催の学術交流プログラムでは、10月1日の午前中に、国立台北教育大学で学生向けの講演を行い(日→中の逐次通訳有)、午後はイギリス、中国、台湾の国際美術展研究者・関係者とのシンポジウムに参加し、台北市民に向けて意見を述べた(日→英・中の同時通訳有)。シンポジウムの内容は、台北市立美術館発行の『現代美術』152号(2010年10月)に全文掲載されている。「福岡市美術館アート・セミナー」では、主に美術館ボランティアを務める市民を対象に、日本の国際美術展、海外の国際美術展と2回に分けて、調査成果と研究の今後の展望等について紹介した。

##### (2) 国内外における位置づけとインパクト

山口県内では、宇部市が主催する「UBEビエンナーレ」で2009年の第23回展設置監督を務めたほか、海外の調査成果等について継続的な情報の提供、意見交換等を行っている。また県文化振興財団が運営する秋吉台国

際芸術村では、滞在美術家の選考委員を務めて国際美術展の調査成果を還元している。九州・山口エリアでは、1999年から開催されている福岡アジア美術トリエンナーレが、2009年に10周年を迎えた機会に研究成果の一部を紹介して、国際美術展の開催や継続の意義について研究者の立場から意見を述べる機会を得たほか、九州藝術学会で最終報告を行って、国際美術展研究の認知と後進の育成に力を注いでいる。他方、国内ではあいちトリエンナーレの開幕シンポジウム（国際交流基金主催の第一部と愛知県主催の第二部があった）の第二部で基調講演を依頼されたことは、「国際美術展の研究者」として認知を得始めたことの表れであると感じている。同様に、台北市立美術館の学術交流プログラムの招待を受けたことも、世界的にみて、広域で継続的な調査を行っている研究者が少ないことの証拠と言えるだろう。以上の活動成果と状況分析に照らして、本研究成果の国内外の位置づけは、先ず国内でも海外でも、「国際美術展研究」という領域の認知と社会的な必要性が意識され始めた段階にあると言える。インパクトについては、6月発行の学会誌抜き刷りの送付後に具体的な反響が得られると思われるが、今後さらに調査領域を拡充してそれぞれの調査成果を通覧できるかたちにまとめられれば、現代美術の最前線の動向に関心のある人々に大いに参照してもらえるものとなると認識している。

### (3) 今後の展望

今回の研究期間内に、会期等の都合でモントリオール、ニューヨーク等の北米の国際美術展を調査対象に含むことができなかった。また、政治情勢に対する不安からハバナ、カイロ、シャルジャの国際美術展への調査も実現していない。さらに、モスクワやブカレスト、プラハなど旧共産圏についても地域的特性を観察することが可能であるだろう。調査対象を拡充し、同時に主要な国際美術展について継続的な調査と資料収集を行っていくことに、今後も全力を傾注する所存である。ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展については、1993年から継続して調査を行っており、1997年に群馬県立近代美術館に学芸員として着任後も、また2002年の山口大学人文学部への着任後も、私費にて調査を継続していたが、2005-07年、2008-10年と3年間ずつ、2回にわたって科学研究費補助金を得られたことは、調査対象の大幅な拡充と広域的な比較考察、グローバリゼーションや文化人類学と美術史学の問題など隣接領域における知見を集中的に吸収する貴重な機会となった。社会学者アンソニー・ギデンズが地球規模化時代に「民主主義の民主化」を説

いていることに倣って、国際美術展におけるより一層の国際的水平主義の実現（先進諸国から第三世界へ美術の「最先端」が紹介される構図を組み替え、いずれの文化にも相応の価値が見出される状況）を理想に掲げて、そうした新しい美術状況に向けた取り組みの足跡を今後も地域横断的に関連づけて紹介して行きたい。

具体的には、単行書刊行の必要性を感じている。2011年5月16日付けの『朝日新聞』に「はじめてのビエンナーレ」という特集記事が紙面の半分を使って紹介された。海外ではヴェネツィア・ビエンナーレ第54回国際美術展、国内では横浜トリエンナーレが今夏開催予定であることにちなんだものであるが、そこに挙げられている書籍は2008年1月に刊行された『ビエンナーレの現在』（暮沢剛巳・難波祐子編著）であり、同書には本研究代表者も前回の科学研究の成果の一部を寄稿しているが、今回、本研究期間内にそうした成果物を世に問うことができなかった。出版に向けた努力は行ったが、原稿をまとめる努力が不足していたと反省している。本成果報告書の提出後に、これまでの調査と研究の成果を見つめ直し、レクチャー等で語ってきたことを文章化する作業に取り組みたい。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①藤川哲「国際美術展における地産性——インディジェネス・アートの視角から」、九州藝術学会誌『デアルテ』、査読有、第27号（財団法人福岡文化財団、2011年6月刊行予定）。

②藤川哲「あいちトリエンナーレ「シンポジウム1・2」と全体総括」、芸術批評誌『リア』、査読無、第25号（2011年2月）、42-46頁。

③藤川哲「発言権／力の獲得——福岡アジア美術三年展の十年軌跡」、『現代美術』、査読無、152号（2010年10月）、16-31頁。

④呉金桃、藤川哲、王璜生、Julian Stallabrass「観察2010台北雙年展（座談紀實）」、『現代美術』、査読無、152号（2010年10月）、56-81頁。

⑤藤川哲「発言権／力の獲得——福岡アジア美術トリエンナーレの十年（二〇〇九年十月コロキウム発表原稿）」、『山口大学文学会誌』、査読無、第60巻（2010年）、1-26頁。

⑥藤川哲「ビエンナーレ化現象と国際美術展史料館」、芸術批評誌『リア』、査読無、第21号（2009年5月）、18-22頁。

〔学会発表〕（計1件）

①藤川哲「国際美術展における地産性—インディジェネス・アートの視角から」、第82回九州藝術学会、2010年7月3日、御花資料館（福岡県）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

①山口大学学術機関リポジトリ  
藤川哲「発言権/力の獲得：福岡アジア美術トリエンナーレの十年（二〇〇九年十月コロキウム発表原稿）」（2010年5月18日公開）

<http://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/G0000006y2j2/metadata/B0600600000001>

②デジタル書架

<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fujikawa/library/library01.html>

・平成22年度収集分

<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fujikawa/library/h22library.htm>

・平成21年度収集分

<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fujikawa/library/h21library.htm>

・平成20年度収集分

<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~fujikawa/library/h20library.htm>

③山口大学美学・美術史研究室

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/>

「Biennale」でタグ付けされた記事の総数238件のうち、本研究期間内に登録された記事は59件（2008/4/1～2011/3/16）。

2011年5月20日現在、以下のURLにて閲覧可能。

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-1>

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-2>

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-3>

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-4>

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-5>

<http://art-groove.blog.so-net.ne.jp/archive/c290347-6>

④artscape BLOG 2：アート日報

2009年2月1日～4月30日分を担当。全19記事のうち、「国際美術展・回想」と題した10回分（3月12日～4月29日）  
<http://www.artscape.ne.jp/artscape/blogs/blog2/>

⑤研究会発表（計3件）

藤川哲「発言権/力の獲得—福岡アジア美術トリエンナーレの10年」、公開コロキウム「福岡トリエンナーレが拓いたもの」（於：福岡アジア美術館あじびホール、2009年10月17日）

藤川哲「海外調査報告—ヴェネツィア・ビエンナーレ第53回国際美術展」、レクチャー・マラソン第3回「山口盆地午前5時」（山口県 木町ハウス・KIMACHI HOUSE）、2009年8月22日

藤川哲「国際美術展 2008—参加美術の時代と人の思想」、国際コロキウム「プロパガンダと芸術」（秋葉原ダイビル首都大学東京サテライトキャンパス）、2009年1月12日

⑥市民講座等（計6件）

藤川哲「福岡市美術館アート・セミナー／第2回世界のビエンナーレとトリエンナーレ」（福岡市美術館教養講座室）、2011年3月5日

藤川哲「福岡市美術館アート・セミナー／第1回ヴェネツィア・ビエンナーレの歴史と日本の参加」（同上）、2011年2月26日

司会＝呉金桃、パネラー＝王璜生、Julian Stallabrass、藤川哲「2010台北雙年展觀察報告」（台北市立美術館1階天才沙龍館）、2010年10月1日

藤川哲「歴史視野中的當代藝術雙年展」（国立台北教育大学藝術館405国際会議室）、2010年10月1日

藤川哲「基調講演：国際美術展の歴史と役割」、「オープニングシンポジウムII クロストーク—国際展の現場」（愛知芸術文化センター12階アートスペースA）、2010年8月22日

司会＝藤川哲、パネラー＝建昌哲、Pier Luigi Tazzi、Jochen Volz、Emmanuelle de Montgazon、「オープニングシンポジウムII

クロストーク―国際展の現場」(同上)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤川 哲 (FUJIKAWA SATOSHI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50346540

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし